

浜詰遺跡発掘調査の聞き取り調査—岡田茂弘先生に聞く—

浜中邦弘・大本朋弥

1. はじめに

浜詰遺跡は、縄文時代後期の貝塚を伴った遺跡で、開発関係の事前調査として昭和33年に網野町教育委員が主催、同志社大学が現場担当して発掘調査を行った。調査の成果については網野町教育委員会・同志社大学考古学研究室「京都府網野町浜詰遺跡発掘概報」1958年と岡田茂弘「京都府酒詰遺跡発見の竪穴住居跡」『先史学研究』同志社大学先史学研究会 1959年を参照していただきたいが、同志社大学酒詰仲男教授のもと当時大学院生としてその調査に携わっておられた岡田茂弘先生に、発掘調査時の状況等をお教えいただけないでしょうかとご連絡をさせていただいたところ、ご快諾のご返答をいただいた浜中と大本は2012年6月2日(土)に先生のご自宅におうかがいし、直接お話を聞かせていただいた。

以下に記す文章はそのやりとりの内容である。岡田先生には貴重なお時間をとっていただき、ただただ感謝するばかりである。

2. 聞き取り調査

岡田：質問していただけたらお答えするという形のほうがよろしいと思います。

大本：分かりました。よろしくお願い致します。

岡田：だんだん尾ひれが付いていろいろな話になるかもしれませんが。

浜中：先生のお時間の許す限り、いろいろとお話をお聞かせいただければと思います。

大本：浜詰遺跡出土遺物の整理の過程で土層の状況などいくつか分からない点がありましたので、その辺をお伺いさせていただければと思っています。今回、岡田先生が丹後のほうに寄託された資料を見せていただきました。こちらがそのコピーです。

岡田：工事のときのものですね。

大本：はい。僕が整理を始めたときは図面の所在がよく分からない状況でしたので、土器のほうの整理を進めていました。まずは基本的な土層について伺いたいのですが、黒色粘土層について、上部黒色粘土層と下部黒色粘土層が貝層を挟んで分布していたようなのですが、一方で黒色粘土層という記述があります。この二つにつきまして、上部黒色粘土層と下部黒色粘土層については黒色粘土層を貝層を挟むという点をもとに分層されているのですか。

岡田：そうですね。貝層の下からは中期の土器が出ていますよね。だから中期の土器が出て、貝層と上部黒色粘土層は後期の土器が出るという認識をしていたと思います。

大本：黒色粘土層についてはこの上部黒色粘土層と下部黒色粘土層が合わさったものというような認識で調査されていたということですか。

岡田：そうですね。特に竪穴住居跡が出たほうでは貝層はなかったわけですから。

大本：そうですか。調査日誌の記述によると、粘土質でありながらも、結構砂が含まれるという感じですね。

岡田：そうです。特に上のほうは砂丘の砂をかぶっているのも褐鉄鉱層が沈着していました。だから、土器にも褐鉄鉱と砂とがドロドロにくっ付いていて、非常に洗にくいものが多かったのです。

大本：はい。そうでした。

岡田：あれは多分、砂丘の飛砂が被覆する直前まで堆積しないで、土器が地上に出ていたのだらうと思うのです。

大本：かなり長い間ということですか。

岡田：ええ。その状態で飛砂がかぶって、さらに砂の中の鉄分が褐鉄鉱層になって沈着するという経過だと思います。

大本：一応、全点水洗いし直したんですけれども、そのときもかなり遺物に付着している褐鉄に悩まされました。これは取ってもいいものなのか、どうなのだろうかと。3回生ぐらいのときから調査、整理を始めましたので、よく分からない状態でいろいろ試行錯誤しながらやっていたわけですが、そういう経過で褐鉄が付着したのですね。

岡田：浜詰の直前というか、その前の年に網野町の宮ノ下遺跡を掘っていますでしょうか？ 宮ノ下遺跡については『貝塚』70号（1957年11月）に遺物の紹介だけ書いていますけれども、やはり、あそこでは砂丘の砂の下に褐鉄鉱層があって、その下に黒褐色土層があって、それが遺物包含層になっているわけですが、関東で掘っていると、砂丘の砂の下に褐鉄鉱層が沈着するという現象を僕は知らなかったもので、一度遺跡が水没して褐鉄鉱層が沈着したのだらうという解釈を書いているのですが、それは明らかに誤りです。浜詰を掘っているときには、前の年に書いたものは間違いだということには気が付いたのですが。

大本：褐鉄が激しいので、僕も一度帯水したのだと思いながら整理していました。そうなのですか。飛砂の影響ですね。

岡田：特に貝層のあるほうについては、調査の始まりのところからお話をしたほうが早いのですが。

大本：ぜひお願いします。

岡田：あの遺跡は、宮ノ下を発掘しているときに、森善重さんという地元の橘中学校の先生が「丹後木津のほうにも縄文の遺物が出るよ」と酒詰先生に言われたのです。それで酒詰先生は宮ノ下の発掘中に現地へ行って、確か森さんは土器が出ているということしか言っていなかったのですが、やはり、若干貝が出る所があるというので、酒詰先生のことですから、これは貝塚だと思ったのです。

貝塚だから、翌年にでも調査しようということで、昭和32年度に網野町教育委員会に、「できれば調査したいから調査費用を工面してくれ」というような話をしていて、33年度になったら調査に入ろうと言っておられたら、あの当時は開発工事があるということは教育委員会はまるっきり知りませんでした。3月に突然あそこを全体で作業して団地造成をするというのです。

団地といっても平屋家屋の団地ですが、ブルドーザが入って全体を削っているという段階で酒詰

先生の所に連絡が入って、私はまだ大学院生でしたけれども、ちょうど東京の家に戻っているときに酒詰先生から電報が来てすぐ現場へ行けと言うので、一度京都へ戻って、それで行ったのですが、北海道函館市立博物館退職後、函館市内におられる千代肇さんが当時酒詰先生のお宅に下宿していました、33年の3月には同志社大学を卒業する直前だったのですが、お宅におられたものだから、「おまえ、すぐ行け」と言うので千代さんが現場へ急行したのです。

大本：そうだったのですか。

岡田：だから、私は3日ほど遅れて行ったのだと思うのです。その辺は日誌に書いてありますが、行ったらもうとにかく斜めに大きな掘削をされて、その断面に貝が露出して、貝と土器が散乱しているという状態で、千代さんはその断面を削って断面から遺物採集をしている段階でした。これではいけないからというので、とにかく地区割りを、地元の掘削の計画図を1枚もらって、あのようの方眼を掛けています。方眼とトレンチとが掘削した所と斜めになっていまして、その斜めの断面の取ったのが貝層の入っているほうでしょうか。どんどん削られていっているものを、その断面だけ採集していたのでは、遺物採集はできるけれども調査はできないので、本当はこれに並行したほうがいいのですが、正規の方眼を掛けなかったので、無理やりの方眼を掛けたわけです。そこでその部分の発掘をして、だから、地区ごとに書かれているのはそうした部分ですね。

ただし、結局、工事でなくなるほうだけの発掘だからというので、ここが一番高いのですが、斜面というほどでもないんですけども、高い所の裏の南向きの斜面の上の部分に、破壊されていないような状態の所を掘ろうというのでこの地区を設定したら、ここで竪穴住居跡が出てきました。だから、多分、北斜面のほうには貝層があって、南斜面のほうに集落があったのだらうと思います。

浜中：そうですか。

大本：そうですか。

岡田：私も最初に行ったときには、とにかく断面を削ると言っていて、断面を削っている最中に千代さんと事務引き継ぎをやって、それから断面を削ったのですが、すぐには工事で削らないような地区があるので、そこに地区設定をして、2メートルグリッドでできる所だけを掘ろうというので掘ったのが地区割りできているものです。

浜中：なるほど。

岡田：でも、全体はもうとても全部は掘れないという状態でした。しかし、いずれ北斜面の遺跡は全部無くなるから、一部残るような所でも調査をしたいというので、台地頂部を掘ってたまたま竪穴住居跡が出たからということになったわけです。

浜中：なるほど。

大本：3トレンチについては、貝層が露出していたため設定したという経緯になるのですか。

岡田：貝は散らばっていましたが、貝層というほどではないのです。貝層、層と書いているけれども、むしろ、地上に散布していると言うほうが正確です。

浜中：地上に出ていたんですね。すごいですね。

岡田：きちんとした包含層はあったという記憶がありませんね。

大本：斜面を下がるにつれて包含層が薄くなるというような感じがあったのですね。

岡田：だから、1トレンチを入れて、2トレンチを入れて、1、2、3本入れていたらこの竪穴（住居跡）が見つかったので拡張したということです。しかし、そこで3月いっぱいというか、4月までかかったと思いますが、完全に調査期限が切れてしまったという段階になったのです。

浜中：そういう経緯でしたか。それでうまい具合に当たったのですね。

岡田：そうです。それで網野町教育委員会にこれは保存して欲しいというので、上部構造の復元をやりましたよね。あの設計は私の設計なのです。

大本：そうだったのですか。

岡田：一度失火炎上したでしょう？

大本：今は建て替えたものだと思います。この前行ったらまだ残っていました。

岡田：燃えて建て替えたというのを人づてに聞いた記憶があります。長方形の竪穴住居跡で、しかも柱が6本でしたかあるというので、僕は、これは切妻だろうし、面白いから復元できないかと言ったら、やろうというので、まさに素人で屋根の茅葺きをしたのです。結局、貝塚は完全に無くなったけれども、一つだけでも遺跡を顕彰するようなものがあればと思いました。

大本：住居跡の復元自体は調査が終わってどれぐらいしてから復元されたのですか。すぐ土盛りをして行ったのでしょうか。

岡田：すぐではなかったですね。ただし、復元のことは調査日誌には書いていないかもしれません。

大本：遺物のラベルを見ていると、5月4日など3月から4月の頭にかけての調査期間中以外の日付のラベルが幾つかあったので、調査後も何度か足を運ばれたのかなと思ひまして。

岡田：調査後も何回か行っています。だから、上屋の復元ももうほとんど地元の大工さんと、それから中学生の労力奉仕と、屋根葺きも地元でかやの葺ける人がいたので。但し当初のものはかやではなくてわらでふいていたと思うのですが、復元するからという話があって、ここに書いたようなことで私が設計をして、ただし、ここには復元したということは書いていないので、これが34年6月ですね。

大本：翌年ですね。

岡田：そうですね。これが6月だから、この年の夏ぐらいに復元したのではないのでしょうか。

浜中：復元住居は燃えたのですか。

大本：その後、調査後何度か訪れられたとき、調査が終わって1トレンチと2トレンチについては埋め戻したという記録が見えたんですけども、竪穴住居跡全体については調査が終わってすぐ埋め戻されていたのですね。

岡田：埋め戻して、復元のときにまた掘り直したのです。

浜中：そうですか。

岡田：ただ住居跡の5本の柱筋が通らないのです。しかし、曲がった桁材がないものだから、真っすぐ通すとこれが外れるのです。だから、桁と梁とを反対にしまして、柱の上に梁を通しておいて、その上に桁を乗せて、だから、普通の和様の建築とは桁と梁が反対なので、大工にこれを建てろと

言ったら妙な顔をしていて、「これは桁と梁が反対になるんだけどな」と言うから、反対になってもしょうがないと言ったのです。実を言うと、これは多分、曲がった桁材で建てていたんですね。

大本：なるほど。

岡田：ところが、今は材木屋で買ってくれば真っすぐな材しかないの、そうするとうまく乗らないわけです。

浜中：そうですね。

岡田：だから、これは対応するけれども、桁を乗せるときには、隅は柱のない所に桁がいたのです。

浜中：今だとそうですね。

岡田：それでも建たないことはないの、それで建ててしまったということです。

大本：調査後の遺跡周辺の状況はいかがでしたか。

岡田：そうですね。多分、復元に行ったときにもまだ

完全に住宅団地のようなものができていませんでしたから、表面採集はできたのです。だから、遺物を拾っていたと思います。

浜中：昔は結構開発が緩やかですね。

大本：そうなんですね。

浜中：やはり、先生の記憶力はすごいですね。自分の十何年前の調査を質問されたら、かなり自信がありません。

大本：僕もです。

岡田：今、思い出しましたけれども、網野でも完全に忘れていたことがありまして、森善重さんといいましたか、この遺跡を発見した森さんについてここに書いていますが、私が東北歴史博物館長をしているときですが、平成12～13年のころだと思うのですが、森さんからこの浜詰のことで手紙が来たのです。

浜中：平成ですか。

岡田：そのときに同志社で浜詰を掘ったけれども、その報告書も出ていないと、何もされてないと、それで酒詰先生も亡くなってしまったということを言っていて、何も書いてないと言うけれども、僕がこれを書いていると、このコピーを送ったのです。そのときは森さんがどういう人だったのか全然覚えていなくて、しかし、そのころ、しょっちゅう同志社に松藤さんの所へクレームか何かをしに行っていたらしいですね。

大本：はい。伺いました。

岡田：そうですか。

浜中：あの方もいらっしゃったのですか。

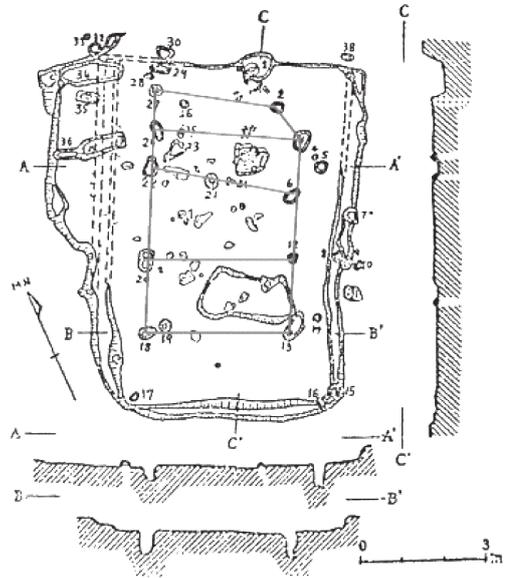


図1 「先史学研究」岡田論考の第2図に一部加筆

大本：はい。

岡田：だから僕は森さんとは1、2往復は手紙のやりとりをしていて、最後に『浜詰遺跡発掘概報』のコピーを送ったら音沙汰が無くなって、コピーをもらったとも何とも言ってこないのです。

浜中：そうなのですか。

岡田：その後、松藤さんに会ったときに、この森善重さんという人がこういうことを言ってきた、だから、資料は同志社にあるはずだと言ったけれども、同志社では全然対応してくれないと言うので、しかも、報告書を出していないと言うので、曲がりなりにも学会の報告としては、ここに載せているから、一番重要な部分については書いていると。あとの遺物整理は多分まだできていないのだろうと。そこで止まってしまって、あと、松藤さんに聞いたら、あの人はあの遺跡を発見した人なのでという話で、確かに酒詰先生と森さんが寝転がっている写真があるのです。

大本：今回、スキャンしてきた写真の中にも入っていました。

岡田：あれは板橋区立郷土資料館で酒詰先生の展覧会があるときに、私の写真を提供するのを探していたらたまたまあれが出てきたので、こういう人だったということで森さんを思い出したのです。

浜中：板橋の展示のほうに行きまして、それで岡田先生が酒詰先生と森さんの写真を持っているというのが分かったのですが、僕らの世代になると酒詰先生の生涯について知る機会がほとんどありません。

岡田：そうですね。

浜中：写真で先生のお顔だけは分かっているんですけども、それで図録も何冊か買わせていただきました。酒詰先生ってこういう先生だったのだなと思いました。

岡田：あれをやった守屋幸一さんは、今年の3月で郷土資料館を定年で辞めました。

浜中：そうでしたか。

岡田：あそこもなかなかいい仕事をされましたよね。

浜中：酒詰先生以外にもずっとそのような考古学の展示をされていましたね。

岡田：ええ。和島誠一さんや杉原荘介さんなどですね。

浜中：和島先生などですね。驚きました。

岡田：板橋区に関係したような調査をした人のものですね。

大本：僕は浜中先生に買ってきていただいた図録を何度か読ませていただきました。

浜中：すごかったです。展示室自体は広いと思うのですが、もう所狭しと隙間なく展示ブースがあり、文章と写真がたくさんベタベタと張ってありました。

大本：図録も、すごい文章と写真の量でした。その中で酒詰先生が浜詰遺跡調査の後半の3月20日以降にみえたような記述がありました。

岡田：そうですね。最後に中学校でしたか講演をしておられますよね。講演の写真があるでしょう？

大本：はい。『貝塚の話』という冊子と一緒に残っておりました。結構忙しくいろいろな所にあいさつ回りをされていたような記録を読ませていただきました。

岡田：だから、今から考えると、あの発掘調査の費用は、結果的には網野町の教育委員会が負担した

に違いないんですけども、実を言うと、幾ら掛かるなどの予算はほとんど立てていなかったのではないかという気がするのです。結局、私と田代克己さんと、学生がもう1人行っていたでしょうか、3人ぐらいで宿に泊まり込んでいました。

大本：あと、平野多加文（同志社大学文学部文化史学科 昭和34年卒業）さんですか。

岡田：平野多加文君でしたか。発掘をしていて、私たちはその宿代を払った記憶がないので、結局、町が負担したのだらうと思います。中学校の生徒さんの勤労奉仕のような格好で、だから、夜は中学校の生徒さんが宿へ遊びに来たりしていました。

大本：現場のすぐ近くに宿を借りて泊まられていたのですか。

岡田：そうですね。木津温泉に泊まったのではないのでしょうか。温泉旅館だったのではないかと思うのですが。民宿ではありませんでした。

浜中：そうですね。そこだけはいいなと思ったのですが。

岡田：あそこは風呂が温泉というよりも、黒っぽいような色をしたお湯でぬるいのです。しかし、あれは多分木津川温泉ではないのでしょうか。そのぬるま湯に入っていた記憶はあるのです。

浜中：何かそちらのほうが興味があります。

岡田：その辺は調査日誌にどこへ泊まったと書いてありませんか。

大本：一度だけ木津館という名称が日誌の雑記の所に出てきておりまして、そういう所なのかなと思ったのです。

岡田：木津館ですよ。

大本：木津館ですね。

岡田：それが温泉旅館でしょう。

浜中：木津館はまだあるのでしょうか。

大本：今はこの辺りはもう温泉宿がかなり乱立してしまっています。

岡田：そうですね。

大本：竪穴住居跡の裏手の今はもうこの辺りには非常に大きな10階建てぐらいのビルの温泉宿が建っている状態にして、現在はもうかなりの温泉地になっています。

岡田：そうですね。

浜中：そうですね。

大本：なので、2、3週間前に行ったんですけども、旧地表面はもう残ってなくて、残念ながら、貝層の露頭があるというような状況は確認することができなかつたです。もうかなり地形が変わっておりまして、10階建ての大きいものだったら無理ですね。

南斜面かなと思われる所が住居跡南西側で1カ所だけ確認できた状態でした。馬蹄形の台地というのはおおそ確認できたんですけども。遺跡の範囲についても先史学研究などでは馬蹄形というふうに記載されておりますが、この辺りで踏査して、遺物の散布がこの台地上で確認できるということですね。

岡田：そうですね。

大本：南斜面のほうも同様に踏査されてということなのですか。同様に遺物が散布されるような状態なのですか。

岡田：南斜面はあまり遺物の散布がないのです。むしろ、北斜面の馬蹄形を囲むような格好で遺物の散布が見られるというほうが正しいでしょうか。その当時には遺跡の南東辺も松林か何かになっていてもう既に住宅が建っていました。

浜中：こちらはもう住宅ですか。

岡田：古くからの住宅だったと思うんですけども、もちろん平屋建というか、2階建てもあったかもしれないけれども、一戸建て住宅ですよ。そして松林のようなものがある、近くにあるのは道路です。その松林からかつて畑だった所だけでは表面採集ができて、そこで遺跡の遺物の散布範囲が分かるということです。南斜面は小さな貝塚というか、貝の散布地点があるぐらいで、あまり大きなものはないのです。だから、大部分がこれだと思うのです。

浜中：狭いですね。

大本：狭いですね。写真にそういう林のようなものが写っていました。図面のコンターラインですけども、このコンターラインはそれぞれの格子の所にレベル用として設置していたのですか。

岡田：ええ。それは現状図で、造成業者が測量した高度が現状図に入れてありました。

大本：造成業者が落としているコンターなのですか。

岡田：ええ。要するに比例配分というか、等高線は私が入れた等高線です。

浜中：先生が入れたものですか。

岡田：はい。現地を見ていて、本当は比例配分によってこういうグリッドで切るといって、等距離に取らなければいけないのですが、実際には等距離にとると非常にぼけたようなコンターラインになるので、まだ地形が残っていたから、地形を見ながらで配分しながら等高線を引きました。だから、必ずこの点とは違わないように、そこを通る点は正確に書いて、あとは見通しで書いています。

大本：そうなのですか。

岡田：もう原地形がないものですから。

浜中：そうですね。昔の調査を見ていると、短期間に集中していろいろなデータを取っておられるので、僕などの調査のやり方では、もうとてもじゃないですけども……。非常にスピード良く調査されています。

岡田：昔は10日続けて発掘すれば大発掘ですから。発掘というのはせいぜい1週間です。

浜中：そうですね。

岡田：だから、トレンチ1本で終わるのはそのせいです。

浜中：なるほど。

岡田：今のように開発に伴うような調査で1カ月やるのが当たり前だというのは、まさに昭和40年以降のやり方です。

浜中：高度経済成長期のということですね。そうですね。僕は高度経済成長期に生まれましたから。

大本：この辺りはもう2メートルグリッドで全部あぜを残して発掘されているので、全部層位的に分かるのです。

浜中：すごいですね。

大本：僕も写真と図面を見て非常に感動してしまいました。

岡田：しかし、普通はグリッド調査をするというのは、いわば当たり前ですから。

大本：まだなかなか徹底されていない時期だったのかなと、そういう先入観のようなものがありました。

岡田：実を言うと、2メートルグリッドでグリッド調査をやるというのは、関東でもまだやっていなかったかもしれません。それから、グリッド調査は古代の寺院跡の発掘で、奈文研の古代の寺院跡の発掘などでは10メートルグリッドぐらいの、むしろ、平面発掘の所々にあぜを残すというのでやっていたでしょう？ あのところ、ペンギン文庫でイギリスの考古学者の Sir M. Wheeler という人の『Archaeology from the earth』(Penguin Books 1956年) という野外考古学の概説書が出ていまして、発掘のやり方が書いてあるわけです。それがまさにグリッド発掘なのです。僕はそれを読んでいるときだったので、イギリス流にそのとおりにやろうと思ったのです。彼はインダス文明の発掘か何かをやっていた男ですから。

浜中：インダス文明ですか。

岡田：モヘンジョ・ダロなどを掘っているのです。

浜中：モヘンジョ・ダロですか。

岡田：それでグリッド発掘をやっていて、ウィーラーの書いているものを見ると、地区設定の地区切りも、今は当たり前前にグリッドの交点、交点に、杭というよりは板切れのようなものに地区ナンバーを書いていっているでしょう？ あれではいかんと。それで50センチか何か、要するに、グリッドを設定したら、その50センチ外側に杭を打てというようなことを書いているのです。

浜中：50センチですか。

岡田：要するに、正確なそのポイントの所に杭を打ったのでは杭がずれるということらしいのです。

浜中：なるほど。(分かりますけれども)

岡田：しかし、それはさすがにやらなかったですね。宮ノ下でそれをやってみたら、砂丘の上だからどんどん崩れて、それでも駄目でした。

浜中：なるほど。そうなんですよね。砂丘は難しいですよね。

大本：全部砂、砂ですから。

岡田：ええ。砂が1メートル以上あったら、もう下にあらためて地区切りを打たないとしようがないのです。それを地表からきちんと規則どおりにやろうと思ったものだから、非常に苦労しました。だから多分、このときにはウィーラーの方式のようなものでグリッド設定をしたのです。

浜中：先生、このころはグリッド設定というのはまだあまり本格的にはやっていなかったのですか。

岡田：というよりも、グリッドという言葉がまだありませんでした。

浜中：そうなのですか。

岡田：多分書いていないと思います。方眼を掛けるぐらいのことを書いてあります。

大本：方眼と書いてありました。

岡田：グリッドという言葉を使い出したのは明治大学の発掘で、杉原荘介なのではないでしょうか。

浜中：そうですか。

岡田：それが昭和40年ぐらいで、加曽利貝塚の発掘です。だから、昭和39年ぐらいでしょうか。

浜中：40年ぐらいですか。

岡田：あのころにやりました。最初は加曽利貝塚のトレンチで発掘したのです。それで、どんどんトレンチで発掘して、トレンチを広げていって全部掘るといようなつもりだったらしいのですが、やはり、杉原さんもそれは無理だと気付いたのでしょうね。途中からトレンチの間をグリッドで掘り始めたのです。

浜中：なるほど。

岡田：そのときにグリッドという言葉を使い出したのです。

浜中：なるほど。学史ですね。

岡田：だから、彼はこのときにグリッド発掘をやっているのですが、グリッドとは言っていなかったという記憶があります。

大本：はい。方眼と書かれていたので、初め僕は用紙の方眼のことなのかと思っていました。

岡田：そういえば、この発掘はグリッド発掘のはしりに近いですね。非常に画期的ですね。

浜中：そうですよね。

大本：これはそうなりますよね。

岡田：そんな意識はなかったのですが。

浜中：今はもうグリッド発掘を含めていろいろな方法でやりますけれども、砂丘は難しいですね。丹後のほうでも史跡で砂丘の遺跡を残したんですけれども、何か水で流されてしまって、石碑のポールしかなくて、国の監査官が見に来たんですけれども、遺跡はもう海の中に無くなっていました。

岡田：そうですか。

浜中：取りあえず、海のことだったのでもうどうしようもないということで、問題はなかったみたいですが。

岡田：解除ですか。

浜中：解除になってしまいました。取りあえず、海のことだったので補助金は問題ありませんでしたが、あれを聞いたとき、京都府で遺跡が無くなったという話で、どうなるのだろうと驚いたのです。

岡田：そうでしょうね。砂丘の遺跡はどんどん砂丘が動きますからね。

浜中：しかし、京都府も、海のことなのでどうしようもないという話でした。ごめんなさい。話がずれてしまいました。

大本：いえいえ。本当にいろいろ教えていただきまして。あと、竪穴住居跡の話にもう一度戻って質問させていただきたいんですけども、たくさん土層図を持ってき過ぎてどれがどれだか。コピーが粗くなってしまって見づらくて申し訳ないのですが、こちらの黒色粘土層の下に粘土があるよう

なんですけれども、一部、私がこの茶色で塗っている暗褐色粘土と書かれていまして、こちらが灰褐色粘土と書かれているものがありまして、暗褐色粘土はこの渴鉄のバンドを挟んでいるように分布していて、ここにバンドがあるのでこれと対応するのかなと思ったんですけれども、そこの辺りを覚えていらっしゃったら、灰褐色粘土はかなり他の所でも、6トレンチなどでも書かれている部分があったりするので、これが広く分布して、この暗褐色粘土だけが竪穴住居跡にあったのかなというふうに考えたのですが、そのような理解で大丈夫なのでしょうか。

岡田：そこまで細かいことは覚えていません。

大本：あまりに細かいことで申し訳ないんですけれども。

岡田：この上に灰褐色粘土があるわけですよね。

大本：はい。暗褐色粘土があります。

岡田：暗褐色粘土があるわけですね。だとすれば、この落ちは確かに竪穴住居跡の中のはずだから、これもそうですから、当然そうでしょうね。だから、最初の堆積土はこの暗褐色粘土ではないでしょうか。

大本：暗褐色粘土があって、その上に遺跡を幅広く覆う灰褐色粘土がたまり、さらに黒色粘土層になったというふうな理解でよろしいでしょうか。

岡田：いいと思います。

大本：そうですか。

浜中：図面上で見えてもそんな感じですよね。

大本：そういう感じかなと思って、それでご意見だけいただきかったのです。

断面図を作るときに、この7Lという杭から何センチ上、何センチ下などというふうに水糸を張って断面図を作成されているようなんですけれども、これは水糸をどういうふうに張られていたのですか。杭がどういうふうに立てられていて、水糸をどういうふうに張って調査されているかがよく想像できなかつたのですが、杭上50センチなど、そういうものもあつたりしまして。

岡田：そのナンバーはこれのナンバーを基準杭にしていると思います。

大本：はい。こちらの杭になると思うのですが。

岡田：だから、その絶対レベルはこれで書かれているから、要するに、海拔高度との対比はできると考えて、それから何センチ高い、何センチ上などという形で水糸を張っているのです。だから、計算上、それと合わせれば絶対高度が出てきます。かといって、斜面ですから、遣り方測量のように全部平面に糸を張れないので、何センチ高いというので糸を張って測っているということです。

浜中：そうですか。随時測っていくということですね。

岡田：はい。だから、確かこの竪穴住居跡自身も斜面にあつたので、水準の水糸を張ると片方がうんと高くなって、片方は地表ぎりぎりになつたりします。

大本：そうですね。

岡田：セクションごとに下げて測りやすいように糸を張っていたのだと思います。だから、その基準にする地区切りについては、もうまさに任意ですよね。たまたま近い所で、当時残っていたものを

使ったということです。それはその杭が無くなっても絶対高度は書いてあるので、この図面との対比で出せるはずだということをやったのだと思います。

大本：ありがとうございます。一度そういうふうには検討してみます。

浜中：これは遣り方測量でしょう？

大本：遣り方測量です。

浜中：僕のころにはもう遣り方測量は無くなっていたのです。僕が教えていただいた人たちからも、これが本来の筋だなどと言われて。でも、最近、やっていませんよねと思ひまして。

岡田：もう今はトータルステーションでしょう？

浜中：トータルステーションでやっています。

大本：トータルステーションばかりですね。

浜中：トータルステーションは大学ではやらせません。古いやり方をやらせます。多分、遣り方（測量）の現場も見たことないでしょう？ ありますか。

大本：1度だけあります。

岡田：遣り方測量を始めたのは建築史の古代寺院の現場です。

浜中：やはり古代寺院ですか。古代寺院の報告書を見ていると、遣り方のものがありますね。文献などを見るとあるのですが。

岡田：だから、建築史をやっている人たちが参加している発掘でないと最初はやりませんでした。だから、考古学ではやっていません。

浜中：なるほど。

岡田：考古学ではそのころまで平板測量が当たり前で、竪穴住居跡でも住居跡の中に平板を持ち込んで、周りを巻き尺で測って線を引くというような格好でやっていたわけです。ところが、あれをやると、特に竪穴住居跡の中に平板を据えれば、まだ放射状だからひずみはないのですが、集落などになると、もう固定したポイントからの平板測量でしょう？ そうすると、当然のことながら、竪穴がみんなひずんでくるのです。

浜中：そうですね。

岡田：だから、斜面だったりすると斜面に沿って測るので、当然実距離が長くなってきます。

大本：そうですね。

岡田：そういう問題があるというのは僕も発掘しているときに気が付いていて、そしたら、僕自身としては、昭和31年に武蔵国分寺跡の発掘がありまして、そのときに、東大の建築史の人たちが参加していて、発掘自体は石田茂作さんが主宰した日本考古学協会仏教遺跡特別委員会の発掘で、今の東京国立博物館の人たちと、それから早稲田大学の人たち、それから東大の建築史の人たち、これは藤島亥治郎さん、「ガイちゃん」がいたからです。

浜中：藤島先生ですか。ガイちゃんと呼んでいるのですか。

岡田：実は、私は上位段丘上のほうでの竪穴住居跡の発掘のほうの班にいたのですが、これは甲野勇先生が中心になって、その別動隊などと言っていました。そちらのほうは早く終わったらスカウト

されて、金堂跡の実測のほうに僕が加えられたので、それで初めて遣り方の経験をしたわけです。それから、石敷きの広場などは、当時はみんな「網」と称していたのですが、2寸グリッドの、要するに、方眼の水糸を張ったものを水平に伏せて、その上から書いていくというものです。あれを「網」と言っていたのです。

その基本は全部遣り方で、遣り方から先ほど言った垂線を下ろしてそこに張っていきます。そうするとひずみがないので、これは正確に測れるというので。それから、水糸からの高さを測っていますから、非常に細かくレベルが入るし、断面図を書くときも正確です。だから、これはいいなと思いました。私は同志社大学大学院へ昭和32年の4月に入ったのですが、今度、同志社の大学院に行きますという話を東大の人たちにしたら、4月から四天王寺の国営発掘があるから、ちょうど都合がいいから出てこいと言うのです。あれは四天王寺調査の2年目ですね。

しかし、まだ大学院へ入っていないのに行っているかどうか分からないので、酒詰先生にご相談すると、「行ったらいい」と言われるので、出掛けまして、私は同志社の大学院に入るよりも大阪の四天王寺の国営発掘のほうに早く入りました。

浜中：そうですか。最初が四天王寺ですか。

岡田：それで、四天王寺で中門班に入っていて中門跡の発掘をやっていたのですが、そしたら、中門の外側に真新しい同志社大学の学生服を着た人が立っているのです。真新しい角帽をかぶっていますから、新入生だというのはすぐ分かるので、私も大学院へ入ったので、同志社の誰だと聞いたら、それが白石太一郎さんでした。

(中略)

浜中：昔に行われたグリッドなどのやり方についてもう少し教えてください。

岡田：遣り方測量というのはそのころから始めて、昭和40年代の平城宮跡の発掘のころが一番全盛期でしょうか。私が奈文研へ入ったのは昭和35年で、もちろんそのときは2000平米ほどの所に遣り方を打って水糸を張っていました。

浜中：その光景の写真などは見ました。

岡田：今でもあそこは遣り方を打っているのではないのでしょうか。

浜中：奈良文化財研究所のほうはそうですね。

岡田：基本的に平らですからね。

浜中：奈文研のほうですが。

岡田：だから、トータルステーション測量ではないですよ。

浜中：トータルステーションも便利なので使ってはいます。しかし、遣り方ですね。

岡田：かえって細かい所を測るのにはトータルステーションを使ったりしていますね。

浜中：はい。しかし、遣り方です。

大本：遣り方なのですね。

岡田：今、発掘で使っているのはあまりないでしょうね。

浜中：そうですね。今はないですね。

岡田：トータルステーションが普及し始めたのはいつでしょうか。昭和の末ぐらいでしょうか。

浜中：昭和の末ぐらいだと思いますね。

岡田：そうですね。平成になるともうトータルステーションが普及しますよね。

浜中：僕が学生でやっていたときにちょうどトータルステーションが入ってきました。

岡田：今はポイント移動などというのはGPSでやっているでしょう？

浜中：もう信じられないですけどもGPSです。

岡田：前は地べたへ張って、スチールテープで引っ張ってやっていました。

浜中：そうですね。僕も学生の頃そのような方法でやっていました。

岡田：最初はGPSの精度が90センチぐらいだったので、とてもこんなものでは駄目だということで使わなかったことがありますが、今は精度が良くなりました。

浜中：今は精度がいいですね。僕もはじめ、一遍使ったときは、何か高さが50センチずれていたんですけども。たまたま隣の調査をしていて、次の年にやったら50センチずれているのが分かったのです。これは駄目ではないかと思いましたが、でも、今はもう非常に良くなりました。

岡田：GPSの機械が良くなりましたからね。

浜中：今は非常に良くなりました。

岡田：同時に人工衛星のほうも良くなりました。

浜中：今は人間でやるよりGPSのほうが良さそうです。

大本：そんなにですか。

浜中：やはり遣り方は基本的に建築のほうから導入されたのでしょうか。

岡田：そうです。建築史の人たちは、それこそ若草伽藍の発掘なども含めてですけども、もともと建物の解体修理をするときには遣り方を打っているわけです。そこから来ているのです。

浜中：そうですか。なるほど。解体修理ですか。

岡田：浅野清先生などがやられた法隆寺の解体修理のときには、建物ですから当然遣り方を打っていますし、特に基礎調査のときにも遣り方を利用して測ったわけです。それを考古学者が見てというのが最初です。建築史と考古学とが一緒にやるときにはやり方測量が、特に建築の場合には、それこそ礎石と礎石の間の寸法をミリ単位で出して古代の尺度を復元するというので、布テープでもって引っ張ったのでは精度が悪過ぎて分からないからということなのです。

浜中：なるほど。そうですね。細かくは分からないですね。お寺は確かにそうですね。やはり、建築史の先生は細かな精度を求めていますね。

岡田：これは一体一尺を何センチ何ミリで、ミリ単位でやって天平(てんぴょう)尺をそれから復元しようというわけですから、そのときに遣り方測量でやらないと駄目だということがあったのです。

浜中：ミリ単位ですね。なるほど。そういうことなのですね。もう理解できました。建築の先生に現場指導に来ていただいたときもそういうことを聞かれ、その必要性を痛感しました。

岡田：だから、一方では、そういう厳密な測量はしないような考古学の調査というのは、集落などを

測って、それで図面上では竪穴住居跡の図面を作るでしょう？ そうすると、それで竪穴の尺度を出すなどという論文がありますよね。25.何センチなどでもっともらしく論文を書いているのは、平面図を信用すればそうなのですが、その平面図を作成するときにどうしていたかというのを考えると、あれは元が駄目ではないかと思います。そこまでのものをやるためには、古墳の実測でもそうですが。

浜中：そうですね。やはり、お寺のほうですか。

岡田：やはり、まさに尺度をきちんと出さないと建物を復元できませんから。

浜中：そうですね。

岡田：そこから始まっているわけです。もともとは上部構造のほうの寸法を採るための、基礎としての礎石の配置などですから。

浜中：そうですね。そこからなのですね。

岡田：そこから来ているのです。

浜中：なるほど。そうですね。ありがとうございます。(大本君の方に)話を戻してくださいね。

大本：あと、最後に1点だけお聞かせください。日誌を何回か読ませていただいて、まず、完形土器が結構出ているようで、そこに少々驚きを持ったのと、日誌の中に加曽利E式のようなキャリパー形土器の断面図と文様のスケッチのようなものが描かれているのですが、この図は出土したものをスケッチされたものになるのですか。

岡田：そうですね。出土状態の写真がありませんか。

大本：全部見てみたんですけども、今、それらの写真がよく分からない状況でして、土器の出土状況写真について、竪穴住居から出土した完形のものについては現在、確認できたんですけども、違うポイントの土器は、確認が取れませんでした。

岡田：これはまさに重機に削られた所から出たものですね。

浜中：削られた所から土器が出たのですね。

大本：そうですね。一応ブロック分けしているのですね。

岡田：まさにこの辺は後期初頭の浜詰式の遺物ですね。こちらはひょっとすると中期かもしれないけれども、こちらは明らかに後期の土器でしょう。

大本：そのかなり屈曲するタイプはそうですね。加曽利E式のようなキャリパー形土器の断面図と文様のスケッチは、もしかしたら加曽利E式にも見えるなと思いながら、加曽利E式がこの地域で出るのを僕はあまり見たことがないので。

岡田：しかし、これは両方とも口縁部は波状口縁ではなくて平口縁のような形でスケッチを描いているけれども、果たしてそうなのでしょうか。

大本：波状口縁だったかもしれないのですね？

岡田：むしろ、波状口縁のほうが多いでしょう？

大本：波状口縁のほうがかなり多いです。緩やかな波状口縁が多いです。

岡田：当然これもかなり大きな破片なのではなくて、特徴的なものを描いているのだと思います。だ

から、これは北白川上層式よりも時期が古くなるのではないかと考えられたと書いているので、それを証明するものとして描いているのでしょうかね。

浜中：波状口縁が多いのですね。

大本：数えたことはないですけども多いです。

岡田：この時期は波状口縁は非常に多いですよ。特に浜詰式は平式もですが。だから、ここではみんな平縁に描いていますが、破片が一部の破片だからでしょう。

大本：日誌の裏にスケッチがあります。

岡田：小型の磨製石斧で、真ん中で折れているものが非常に多くないですか。

大本：そうですね。石器はまだパラッとしか見ていないんですけども、確かに磨製石斧はそういうものも見られます。

岡田：10cm程度の石器で真ん中で折れているものがかなり多かったという記憶があるのです。だから、あれはソケットにはめていて、ソケットの所で折れているのかなと思ったのです。

浜中：ソケット部分ですか。

岡田：ソケットから出ている部分とソケットとの間で折れているのではないかと思います。だから、一度それは全部測って、どこで折れているかというのを試してみると面白いかなと思った記憶があるのです。

大本：そうですね。そういう検討もしてみます。

岡田：普通の磨製石斧で、定角式の磨製石斧よりも比較的細かい細工をしているような小型の石器が多いですね。貝層の中に焼け土があるなどというのは、ここでは住居跡は分からなかったのです。

大本：かなり焼け土の記述が多くて、何点あったかはその記事をまだ拾い切れてなくて、全部把握し切れてないんですけども、新聞記事をざっと読ませていただいて、当時のものを見せていただくと、約20カ所から焼け土の範囲があって、かなり灰と一緒に厚く堆積していたようなので、住居の跡だと思われるということです。

岡田：3月25日が酒詰先生の講演ですね。

大本：その講演はどういう経緯で行われたものなのですか。その遺跡の説明会という類のものなのでしょうか？中学生などがかなり手伝っていますよね。そういう経緯を踏まえて実施されたということですか。

岡田：そうです。ここにチラッと出てくる吉岡俊之助先生という方はもう亡くなってしまったのでしょうか。地元ではその吉岡先生にかなり世話をさせていただいた記憶があるのです。森さんは確かに発見した人なのですが、僕には森さんに発掘中にお世話になったという記憶があまりないのでケロッと忘れていたのですが、これは確かに吉岡先生という方が出てくるから、吉岡さんという方はおられました。やはり学校の先生だったと思うのですが。

大本：はい。橘中学校の社会科の先生だったということです。森先生も今どうされているのか分かりません。

岡田：森さんも橘中学校におられたのではないのでしょうか。ここに確かに吉岡先生とともに酒詰先生

が網野町へあいさつ回りに行かれたと、教育長は不在であったため、町長はじめ、関係者に会い、懇談されたと書いてありますが。

浜中：吉岡先生ですか。

岡田：吉岡先生というのは前のほうに出てくるのではないのでしょうか。

大本：吉岡先生は頻繁にお名前が出てきます。

岡田：ええ。頻繁に来ていたのです。その吉岡先生の名前のほうはもうすっかり忘れてしまいましたけれども。

大本：予算問題などについても吉岡先生と話し合われたような記事がありました。

岡田：教頭か何かをしておられたのでしょうか。中学校の校長さんとはあまり親しくした記憶が思い出せないのですが。最初の千代さんがやっているころの日誌に、吉岡先生には連絡うんぬんとありますね。最初から吉岡先生で名前が書いていないのですね。

大本：はい。名字しか書かれていませんでした。

浜中：橘中学校に残ってないですかね。

岡田：これは三浦さんに調べてもらったら分かるかもしれませんが、吉岡先生にスライドのワンセットを貸し出したことがあるのです。そして、返ってこなかったのです。浜詰の地でスライド会をやりたいからということで、多分、二十数枚ではないでしょうか。1箱一番いいものを貸し出した記憶があるのです。借用書を入れさせていないものですから。だから、当時、この橘中学校におられた吉岡先生という方が今どうしているか、そこに35ミリのスライドがないかどうか、三浦さんから調べていただくといいと思います。

多分、それは吉岡先生に貸し出してもいいようなものだから、スライドのフレームにどこの地点のものだというのは書いてあったのだらうと思うのです。そういう細かい説明が付いていないと、スライドを渡しても説明ができないですから。だから、地元のどこかにある可能性がありますね。

浜中：そうですね。

大本：もしかしたらそうかもしれないですね。

浜中：三浦さんにちょっとお伺いしてみます。

岡田：橘中学校にあるとは思えないけれども、あったら廃棄されてしまっているでしょう。

浜中：そうですね。昨今、廃棄が多いですからね。

大本：橘中学校のほうは分からないですね。網野高校のもともと持っていた資料は、今、京丹後の資料館に寄託されているのです。

岡田：あれはそうですか。あれは積さんの資料ですか。

浜中：そうですか。積先生ですか。

岡田：京都府立丹後郷土資料館の初代館長さんが積さんですか？

浜中：そうですね。

岡田：だからでしょうね。積さんはこの調査のときにはまるっきり関係していなくて、多分、表面採集で拾われたのではないのでしょうか。見には来ておられた記憶があるので積さんの顔は知っていま

すけれども。だから、高校生はまるっきり参加していません。

大本：そうですね。小学校と中学生、中学生がかなりたくさん参加しているようです。

岡田：やはり橘中学校で、これはやはり吉岡先生の関係でしょうね。ちょうど春休みだからでしょうね。

大本：そうですね。

岡田：ちょうどまさに春休みの間だから、もう授業が終わっていて、先生に協力しろということをおわれたから、男の子も女の子もいましたね。

浜中：そうですか。女子もいたのですか。

大本：写真を見たら、かなりテスコのようなものを使ってやっている作業風景が見てとれまして、みんな学生服を着ていました。

岡田：そうですね。男の子はあのころはみんな学生服を着ていましたね。女子はそうでもなかったのですが。もっとも、そうですね。セーラー服を着ている子もいましたね。

浜中：セーラー服で作業しているのですか。

岡田：ああいう風俗は今では考えられないですからね。

大本：中学生はもうことごとく学生服で、岡田先生たちと一緒に記念写真に写っているのもみんな学生服でした。

岡田：そうですね。だから、あのころはやはり、中学校になるとみんな学生服を着るという習慣があったのですね。

浜中：今はありませんね。

岡田：いつ無くなったのでしょうかね。

浜中：今はその風景はありませんね。すごいですね。

岡田：男の子は丸坊主でしょう？

大本：そうですね。みんな丸坊主でした。

浜中：僕も丸坊主でした。僕らが中学校のときは丸坊主は強制でした。

大本：そうなのですか。

岡田：私のときもそうでした。

浜中：何かもういきなり髪が無くなってしまいました。

岡田：高校へ上がると長髪にしてもいいということでした。

大本：そうなのですか。

浜中：僕もそうでした。中学校だけ丸坊主になって、いきなり坊主になるのも嫌なので、小学校6年ぐらいに少しやりながら似合うようにしたのです。

岡田：小学校も丸坊主でしたね。

浜中：先生はそうですか。僕のころは中学校だけでした。

岡田：私が小学校のときはまさに戦争中ですから。

浜中：先生はそうですね。

岡田：6年生のときに敗戦ですから。6年生の8月が敗戦でした。中学は旧制の中学へ入って、1年から2年に上がるときに新制中学に切り替わったのです。そのころはまだまるっきり戦前の風習が残っていました。だから、中学までは丸坊主や学帽をかぶれと言われるのが当たり前でした。

浜中：学帽は懐かしいです。かぶっていました。

大本：そうなのですか。

浜中：僕は故郷が石川なんですけれども、石川は残っていました。

大本：そうなのですか。

浜中：嫌でしょうがなかったのですが。

岡田：高校に入っても、長髪にしても帽子はかぶらないといけないのです。

浜中：先生、僕はさすがにそれはなかったです。なかったんではないかと。

岡田：そうですか。まず、帽子をかぶると髪の色が崩れるでしょう？

大本：そうですね。

岡田：だから、嫌でしょうがありませんでした。

浜中：今の現場でヘルメットをかぶるのと一緒ですよ。ベタッとなってしまいますから。

大本：髪はそうですね。

浜中：そうなんですよね。今はもうヘルメットをかぶらないと現場は駄目なのがつらいのです。昔などは麦わら帽子だったのに、仕方がないのですが、つらいですよ。

岡田：そうですね。私はヘルメットをもちろんかぶったことはあるけれども、ヘルメットをかぶらされた記憶はありません。

浜中：ありませんか。もうこの10年で強制的にヘルメットになってしまいましたね。

岡田：そうですか。

浜中：やはり、どうにも。

大本：僕も今は現場のほうではヘルメットです。

浜中：夏は、行ったら本当に麦わら帽子をかぶって、いいと思ってやっていたんですけども。

岡田：麦わら帽子が一番いいですね。

浜中：もう本当にヘルメットつらいです。

大本：そうなのです。蒸れるなどと言いながらかぶってます。

岡田：麦わら帽子に長靴というのが発掘スタイルです。

浜中：そうですね。それがもう、今も長靴は残っているんですけども、頭がヘルメットで暑いのです。

大本：工事現場の人と同じ感じですよ。

浜中：ヘルメットでも別にいいんですけども、上から何も落ちてこないと思うのですが。他は大本さんはありますか。

大本：もうあらかた教えていただきました。

浜中：本当ですか。

大本：はい。

浜中：そうですか。

大本：はい。そうですね。

浜中：お聞きしたいことは他はありませんか。

大本：あとは大体教えていただいたので、もういろいろな疑問点はだいぶ氷解した感じです。

浜中：そうですか。先生、ちょっと一つ、これをコピーさせていただいたんですけども、今後、報告書にまとめるときに少し図面なども掲載してもよろしいでしょうか。

岡田：どうぞ。もうお任せします。